(東北アジアにおける安心・安全」シンポジウム-中国を起点として(産経新聞」-2006.10.21

産経(大阪)

「東北アジアにおける安心・安全」シンポジウム —中国を起点として

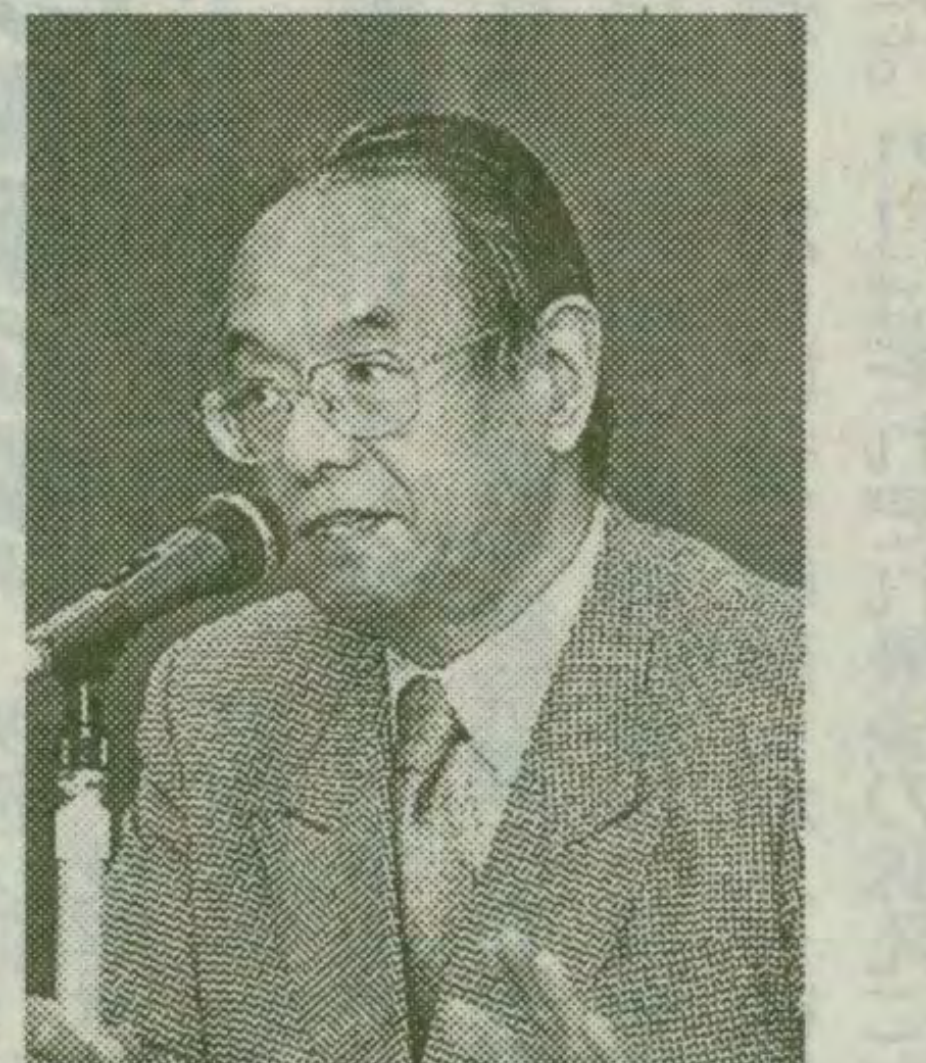
東北アジアの安心・安全問題について、熱心な意見が交わされた

人間が希求してやまない安心・安全。しかし、その感覚や取り組み方には、地域が持つ独自の文化・歴史が影響する。独特の地域である東北アジアにおける安心・安全とは——。同志社大学ヒューマン・セキュリティ研究センターと産経新聞社が、9月30日に京都ガーデンパレスホテルで開いたシンポジウムは、そんな問いかけに答えるものとなった。国際教養大学学長・中嶋嶺雄氏の「日中間の安心・安全」と題した講演を皮切りに、様々な分野の専門家による幅広い視点からの検討が行われた。

講演

法感覚に違い、信頼関係の構築難しい

国際教養大学学長（国際関係論専攻）**中嶋　嶺雄氏**



日中間の安心・安全は重要なテーマであります。日中間で安全・安心を確保することは実に難しいし、当面期待できないと思います。日中関係は、一時的にはともかく一度崩れるとなかなか修復できない「異母兄弟」の関係です。

「安心」は国民感情として相互信頼に立脚するものですが、中国という国のレベルで考えると、信頼関係の構築が難しい。昨年の反日デモにはたいへん激しいものがあり、そういう状況では、中国と安心して付き合うことはできません。

普通に旅行をしていても今の中国ではかなりの緊張を感じると思います。一方、同じ中華世界でも台湾には親日感もあり、日本人にとってはすごく「安心」できます。

「安全」は個人のレベルというよりも、国家のレベルのことになります。中国は最近、軍事的色彩が非常に強まっています。しかし、それは「民衆のための安全保障」ではなく「国家のための安全保障」です。台湾海峡の安全についても軍事力で威嚇し、さらに日中間も軍事力で威嚇しようとしています。

こうした状況の中で、昨年2月に日米安保協議で「2プラス2」の合意がされたわけです。中国の脅威に対して大きな有効性を持つもので、その意味で、小泉外交を評価しています。

日中の安心・安全は最終的には法に依拠しなければなりません。しかし、両国間には法感覚の大きな違いがあります。日本は法治国家ですが、中国は法治国家とはいえません。従って中国が共産党の一党独裁体制をやめない限り、日中間には「安心」も「安全」もないということです。

対談

同志社大学教授（アメリカ外交など専攻）**村田　晃嗣氏**

価値外交は諸刃の剣　村田氏

日本の存在感を主張　中嶋氏

村田　中国の台頭を考えると日米同盟は、一層重要になると思います。アメリカが共和党政権でも、民主党政権でも、中国は扱いにくい国であることは変わらない。日本は、日米関係を強化することを考えるべきだと思います。

中嶋　対中宥和政策を取っていたクリントン政権でさえ、台湾の総統選挙で中国が軍事力を行使した際、台湾を断固として守ろうとした。

村田　伝統的な軍事的問題のほかに、中国の環境破壊など非伝統的な問題で、中国がこの地域に及ぼすネガティブなインパクトは計り知れないものがあります。

中嶋　環境問題と人権問題は相関性があり、人権を抑圧する国に、環境と言っても無理。アメリカと共有する価値観を日本外交の基礎とすることが大切だと思います。

村田　「東アジア共同体」ということがいわれますが、日中間をはじめ、東南アジア諸国やインドなどには基本的な価値観に大きな隔たりがあります。貿易量などが増大しているが、共同体としては価値の共有がなければ成り立ちません。

中嶋　中国は大陸性、日本は島嶼性、朝鮮半島は半島性と、文化や歴史の違いはものすごい。日本は自国の文化を固有のものとして位置づけていくべきだと思います。

村田　安倍内閣がアジア外交でブレークスルーが得られるかは、靖国問題が大きなネックといえます。さらに安倍内閣が主張する価値外交というのは、諸刃の剣です。常に自国の価値観などが問われ、今の日本国内が靖国問題などで異なる意見に非寛容になっているのならば、価値観を武器に国際外交の舞台で戦えるかは疑問です。

中嶋　靖国問題はむしろ、中国に迎合するかのような報道をする日本のメディアなどの国内問題で、日本の民主主義が未成熟といわざるを得ない。日本は戦後、一度も戦争をしていない国です。日本の存在感を胸を張って主張できれば、東アジア外交の展望も開かれると思います。

中国の道徳から

大阪大学大学院教授（中国哲学専攻）**湯浅　邦弘氏**

「智、信、聖、仁、義、忠」。これは古代中国の文献に整理されている6つの徳です。「智」は男性（夫）に求められる道徳。知性を働かせて正確な判断をしなければならないという意味。信は女性（妻）の徳で、夫を信じて従う。聖は父の徳で、子供を教育する。仁は子供の徳。義は君の徳で、正義の心で部下を従える。忠は臣の徳です」。これらは、並列ではなく、夫婦、家庭といった「内」の安定があって初めて地域、国家という「外」の安定につながっていくという方向性も主張しています。「安心、安全」はインフラ面より心の問題。古代中国の考えは現代にも通じそうです。

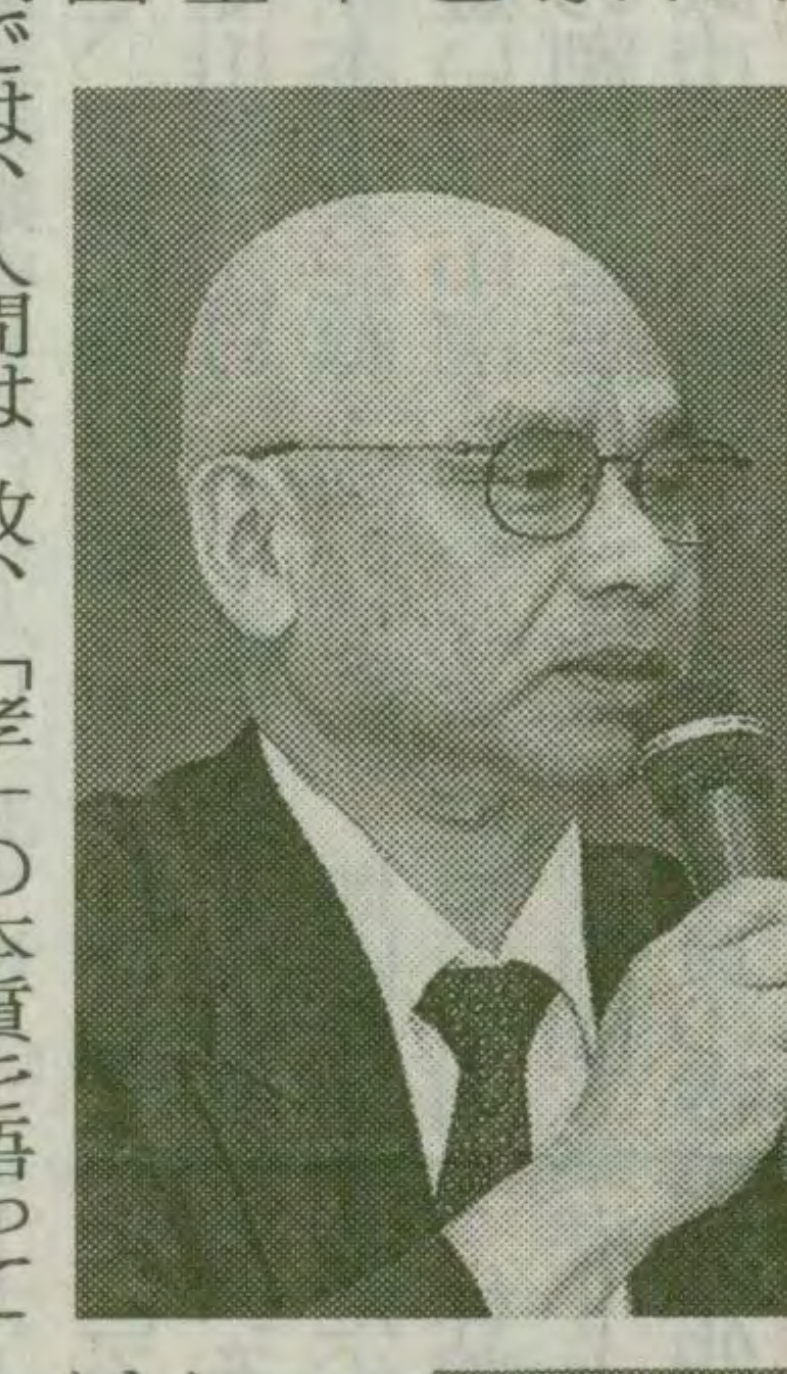
中国の法から

神戸大学大学院教授（法社会学など専攻）**季　衛東氏**

ヨーロッパでは約200年かけて行ってきた近代化、産業化の社会変動が、中国では約20年間に短縮して進行しています。13億の民が「自由競争」というスローガンの下で一気に走り出した。急速な変動の中で、伝統的な規範に基づく「安心・安全」や連帯が揺れ動いています。法に対する不信感もあります。多くの実態調査では、現代中国で信じるものは、軍隊、その次が行政機関。司法機関という回答は50%を超えるか超えないかでした。近代法治秩序をどうやって構築するかが、中国の一番大きな課題。解決できるかどうかまだ分かりませんが、努力しています。

中国の宗教から

名古屋大学大学院教授（中国哲学専攻）**竹内　弘行氏**



生きた魂が死んで鬼神になる。祖先崇拝、「孝」という問題が中国の宗教の基本です。中国の伝統的解釈では、人間は陰と陽の「気」でできており、死ぬことは気が散ってしまうこと。朱子は「気は無くなってもその根っこは残る」と説き、「理屈ではない」と語っています。「説明できない、しかし…」というのが、中国の宗教、「孝」の本質を語っている気がします。「孝」を設定することが一族の幸せ、個人の幸せになる。学生たちに「年金破綻が心配だったら、子供に親孝行させるようにしなさい」と話します。中国2000年の智恵は親孝行にあります。

社会（人間関係）を通して

愛知県立大学助教授（現代中国政治専攻）**三宅　康之氏**

湯浅、季両氏のお話から、「中国のことは分かった」という気がしてきた方もおられると思います。さらに話を広げ、近代デモクラシー社会と比較して中国社会はどのような特色を持っているのか、簡単にまとめてみたいと思います。中国社会は、統治者を「悪いことはするはずがない」という性善説で扱ってきた。一方、被統治者は「何をするか分からない」という性悪説。デモクラシー社会では、統治者は「権力は腐敗する」という性悪説。被統治者は「その選択である選挙を受け入れる」という性善説です。経済発展を遂げた中国では「これからは民主化だ」という話もありますが、根本的な人間観、法整備を変えない限り、「民主化は遠い」と感じます。

中国の医学から

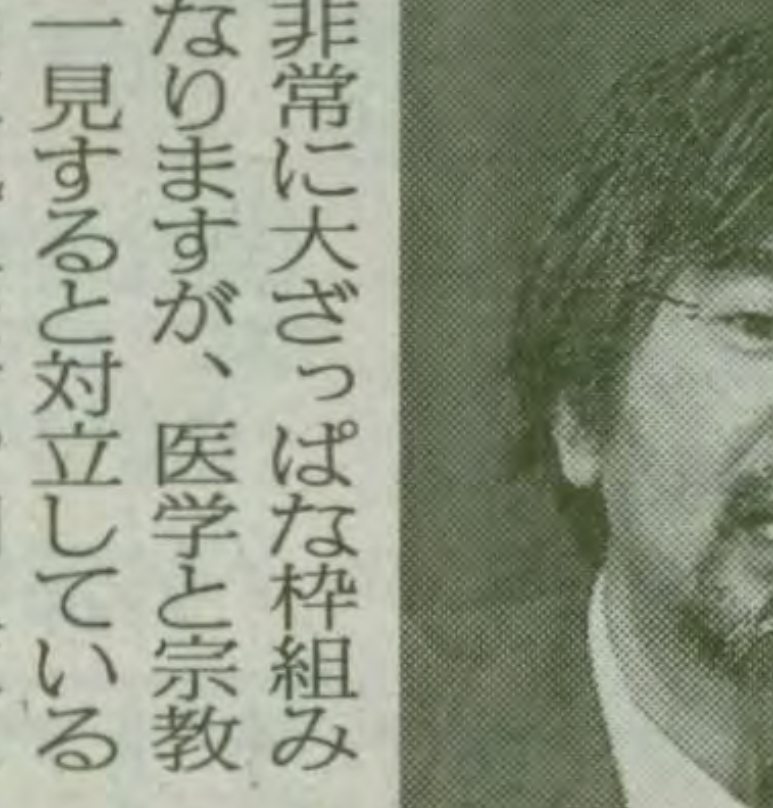
森ノ宮医療学園専門学校講師（鍼灸学など専攻）**長野　仁氏**

日本では医学とは現代西洋医学のことで、東洋医学は補完医学・代替医療という位置付けになります。学生たちには西洋医学との違いを「東洋医学は自然治癒力を生かして治療する」と教えます。経絡（スジ）と経穴（ツボ）には、実効性の高い反応を示すものがあります。

しかも資格制度に含まれない民間療法の中に、臨床的に見て優れたものが多い。中国では経絡と経穴を国家が一括管理しているので、民間療法的な情報は広がりにくい。中国には伝わりにくいもの（有効なスジとツボ）が日本で残り、患者さんの「安心」と薬のように副作用を伴わない「安全」につながっています。

個人を通して

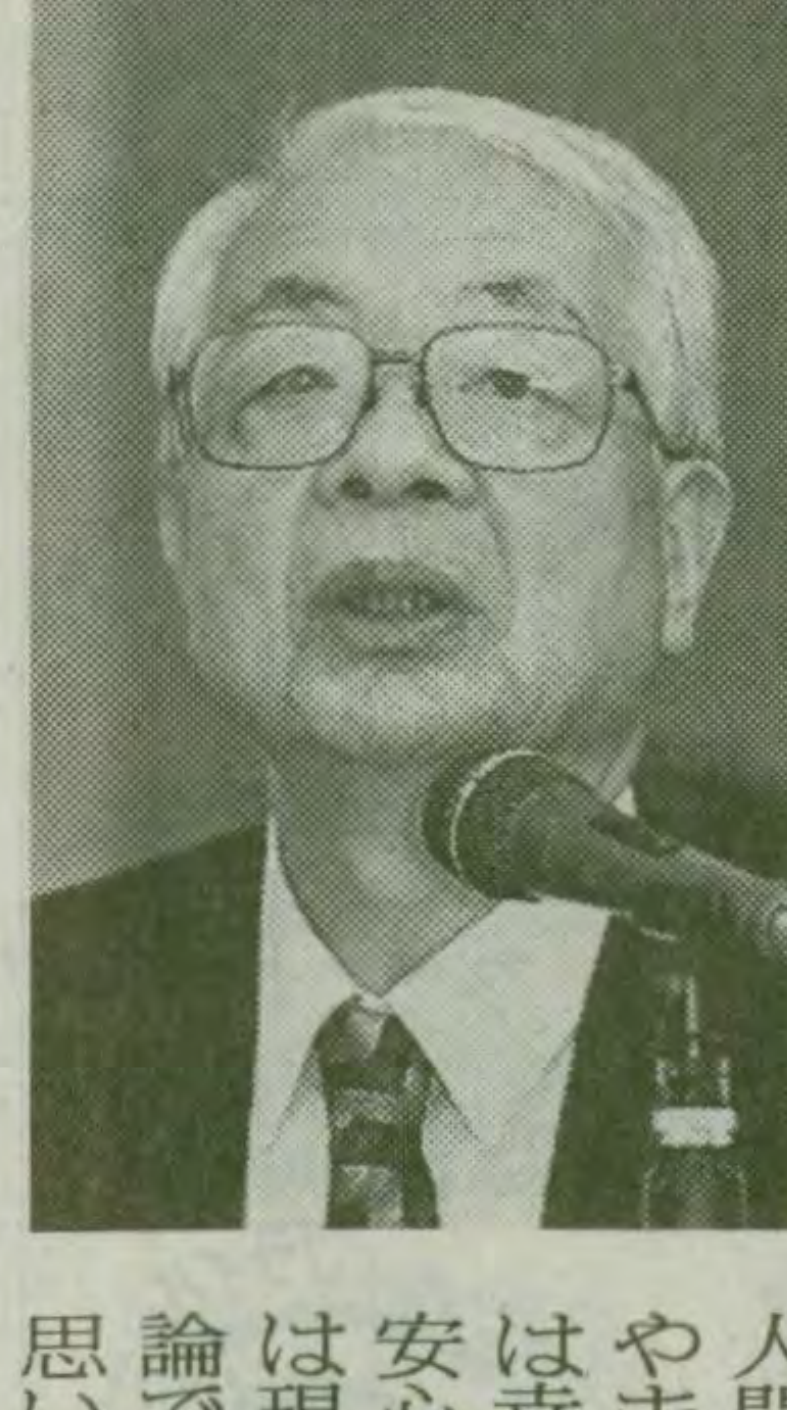
大阪府立大学教授（中国哲学専攻）**大形　徹氏**



非常に大ざっぱな枠組みになりますが、医学と宗教は一見すると対立しているように見えます。個人にとって医学が肉体の安全と関わっているとすれば、宗教は魂の安心と関わっている。医学が人の生命を守り、長らえようとするならば、宗教は人の死後に異なる世界を想定して、生前から死後につながる魂の永世を願っています。医学、宗教は肉体と精神というすみわけが行われていますが、クロスオーバーしている面もあります。病の元となる悪霊退散を祈り、薬を用いて退治しようとします。古代から現代にかけて、中国の医学、宗教はいろいろな要素を取り込み、変化しています。

【総括】（総合司会）

同志社大学専任フェロー（中国哲学専攻）**加地　伸行氏**



「東北アジアにおける安心・安全」という広いテーマの内、まず、中国を切り口にしました。長い歴史と膨大な文献がある中国を知るため、「少しでも道をつけたい」という思いがありました。本日の議論を通じ人間が求めてやまないものは幸せであり、安心・安全論は現代の幸福論であろうと思います。

同志社大学大学院
総合政策科学研究科

院生募集
■公共政策コース
■企業政策コース
■ヒューマン・セキュリティー研究コース
■ソーシャル・イノベーション研究コース
■技術・革新的経営研究コース

入試説明会
〈後期課程〉2006年11月4日（土）
15:00〜16:00
〈前期課程〉2006年12月2日（土）
15:00〜16:00

●詳しくは下記にてお問い合わせください
同志社大学大学院
総合政策科学研究科事務室
TEL:075-251-3860
FAX:075-251-3094
メール:ji-sosei@mail.doshisha.ac.jp
URL:http://sosei.doshisha.ac.jp